

浄土論註 2025年担当箇所 2025年9月5日

原田和男

お断り。この半年、家庭の事情等で集中して勉強することができなかった。

ほとんど材料の提示で終始する。

一、はじめに

○担当箇所

教行信証に引用がない箇所

○方針は疑問を出すにとどめる。

○西田幾多郎『自覚に於ける直観と反省』

直観＝体験；『願生偈』、反省＝言葉による表現；長行直観がなければ、ただ文字をいらうだけ。

○参考にしたもの

- ・東本願寺 解説浄土論註
- ・西山邦彦氏『意識浄土論註』
- ・細川先生 曇鸞章
- ・平野氏 浄土論註講義一（僧侶の勉強会の記録）

儒教と道教（老子）が前提になっている 当時の中国の民衆が相手

\*科学文明に覆われた現代では、論註は非常に読みにくい。デカルトと同時代人が排除したアニミズムが入っている。

○論註の柱

浄土論 空観 儒教・道教

二。担当箇所

(1) [東本願寺 解説浄土論註]下P133～

障菩提門というのは

菩薩是の如く善く廻向成就を知りて、即ち能く三種の菩提門相違の法を遠離すべし。

何等か三種。

一には智慧門に依りて自樂を求めず。我が心自身に貪着することを遠離するが故に。

進むを知りて退くを守るを智と日、空無我を知るを慧と日。智に依るが故に自樂を求めず、慧に依るが故に我が心自身に貪着することを遠離す。

二には慈悲門に依りて一切衆生の苦を抜く。衆生を安んずること無き心を遠離するが故に。苦を抜くを慈と日。樂を与えるを悲と日。

慈に依るが故に一切衆生の苦を抜く。悲に依るが故に衆生を安んずること無き心を遠離す。

憐愍

三には方便門に依りて一切衆生を憐愍して、心、自身を供養し恭敬する心を遠離せるが故に。

正直を方と曰う。己を外にするを便と曰う。正直に依るが故に一切衆生を憐愍する心を生ず。外己に依るが故に自身を供養し恭敬する心を遠離す。

これを三種の菩提門相違法を遠離すと名づく。

〔解説〕

菩提にいたる門を障げる（心を離れる）とは、（論につきのようにならされている）

菩薩はこのようにして善く回向が成就されたことを知って、ただちに菩提の門に相違する三種の法をはなれるのである。

三種とはどのようなものか。

一には、智慧の門によって自己の樂を求めず、我執の心によって自己自身に貪着することをはなれるのである。

（仏道に）前進することを知って（二乗に）退却しないことを智といい、（あらゆる存在は）空であり無我であると知るのを慧という。智によるから自己の樂を求めず、慧によるから我執の心によって自己自身に貪着することをまったくはなれるのである。

二には、慈悲の門によって生きとし生ける者の苦しみをのぞき、衆生を安らかにすることのできない心をはなれるのである。

苦しみをとりぞくことを慈といい、樂を与えることを悲という。慈によるから生きとし生ける者の苦しみをとりぞき、悲によるから衆生を安らかにすることのできない心をはなれるのである。

三には、方便の門によって、生きとし生けるものをいつくしみ、自己自身が供養されうやまわりたいという心をはなれるのである。

まっすぐなことを方といい、自分を度外視することを便という。正直によるからあらゆる衆生をいつくしむ心を生じ、自分を度外視するから、自己自身が供養されうやまわりたいという心をはなれるのである。

（\*正しさとは土地柄の出る仕事ぶり 出西窯 p 1 2 6。同「個人と集団」の合一 p 1 4 9）

（\*宮澤賢治 雨ニモマケズ ジブンヲカンジョウニイレズ）

これを菩提の門に相違する三種の法をはなれるというのである。

[語彙]

一障菩提門：卷下劈頭の十科を標するところでは「離菩提障」と名づけられているが、いまは次の順菩提門と対応する意味で障菩提門と挙げてある。意は菩提にいたる道を障げる心を遠離するということ。

二菩提門：門は出入りの義。菩提を獲得し、菩提を敷衍する門。菩提 (bodhi) は仏のさとり智慧。覚、智、知、道などと訳す。

三知進守退：『易経』に「知進而不知退」とあり、淮南子に「知進而不知却」とある意。自ら進んで衆生救済の道に立つことによって、二乗の自調自度の心に退却することをふせぐの意。

\*自調自度：自らととのえ用意すること[中村 p 5 5 7]

四抜苦与楽：『十地経論』等による通途の釈では、抜苦を悲、与楽を慈というが、『大般若経』卷十五には、この『論註』の釈と同じ釈がみえる。

○順菩提門というは、菩提是の如き三種の菩提門相違の法を遠離して、三種の随順菩提門の法満足することを得るが故に。

何等か三種。

一には無染清浄心、自身の爲に諸楽を求めざるを以ての故に。

菩提は是れ無染清浄心なり。若し身の爲に楽を求むれば即ち菩提に違す。是の故に無染清浄心は、是れ菩提に順ずる門なり。

二には安清浄心、一切衆生の苦を抜くを以ての故に。

菩提は是れ一切衆生を安穩にする清浄心なり。若し心を作(な)して一切衆生を抜いて生死の苦を離れずば、即便(すなわち)菩提に違す。是の故に一切衆生の苦を抜くは、是れ順菩提門なり。

三には、樂清浄心、一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に、衆生を攝取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に。

菩提は是れ畢竟常樂の心なり。若し一切衆生をして畢竟常樂を得しめずば、即ち菩提に違す。此の畢竟常樂は何に依ってか得る。大乘門に依る。大乘門というは、謂わく、彼の安樂仏国土是れなり。是の故に又言わく、衆生を攝取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に、と。

是れを三種の随順菩提門の法満足すと名づくと、知るべし。

### [解説]

菩提の門に順ずるとは、(論に次のように言われている)。

菩薩はこのような菩提の門に相違する三種の法をはなれて、菩提の門に随順する三種の法に満足をするのである。

三種とはどのようなものか。

一には染(けが)れのない清浄な心、この心は自分のためにいろいろな楽を求めることがないからである。

菩提は染(けが)れのない清浄の場処である。もし自身のために楽を求めるならば、菩提にそむくことになる。だから染(けが)れのない清浄な心は菩提に順(したが)う門である。

二には衆生を安らかにする清浄な心、この心はあらゆる衆生の苦しみをとりのぞくからである。

(\*清浄 我がない。鳥の声)

菩提はすべての衆生を安穩(やすらか)にする清浄の場処である。もしわざとあらゆる衆生をして生死(まよい)の苦しみを離れさせないなら、それは菩提にそむくことになる。だからすべての衆生の苦しみをとりのぞくことは、菩提に順(したが)う門である。

三には衆生に楽をあたえる清浄な心、この心はすべての衆生に大菩提を得させ、衆生を救いとして、彼の安楽国土に生まれさせるからである。

菩提はこの上ない常楽の場処である。もし全ての衆生にこの上ない常楽をあたえないなら、菩提にたがうことになる。この無上なる常楽は何によって得ることができるかといえ、大乘門によってである。大乘門とは、彼の安楽国土のことである。だからまた「衆生を救いとして、彼の安楽国土に生まれさせるから」といわれるのである。

これを菩提の門に随順する三種の法が満足したという。よく承知すべきである。

### [語彙]

一清浄心：清浄は単なる純粹、清らかさの意ではなく、先に清浄句といわれているように、真如法性それ自体が、世間的に顕現する態としての清浄性、つまり、真如法性が世間全体を清浄にする用きとして顕現することをさしている。従って、清浄心とは菩提に順ずる心、真如法性にもとづいている心に意である。

二作心：無作心、作心の作心ではなく、わざと、故意になどの意味

三畢竟：atyanta 究竟、至竟、終竟、最極、恒等とも訳す。一般には、最終的な(に)、永遠の(に)、などの意に用いられるが、いま『論註』が吟味しているように、前後の文章の内容次第で多様な意味が含まれる。ちなみに梵語辞典によって畢竟の意にはまると思われ

る語を列挙すれば次のとおりである。無限の、果てしない、永久の、不断の、不変の、絶対(的)の、完全な、完璧な、決定的な、無条件の、純然たる、最後まで、必ず、非常に、巨大な、強力な、不滅の。(p 104の二)

○意識浄土論註 西山邦彦

p 247

○障碍の突破

障菩提門(覚存の門を閉ざす障碍を突破すること)について、『饗宴』に、「勇者は、このようにして廻向(立場の転換)の実現に目ざめるやいなや、たちまち覚存の門を閉ざす三種の障碍(覚存にそむくありかた)を除去することができる。何を三種の障碍とするのか。」

一には智慧の門に入って、自分だけの快樂を求めない。自我の身があると貪着する我見からまったくはなれているからである」という。

進歩する方向を見通して、退転しないように見守るのを智といい、あらゆる存在者が空であり無我である(すべてのものに実体がない)とさとするのが慧である。智によるから自分だけの快樂にふけろうとはせず、慧によるから、自我の身に貪着する我見から遠く離れることができるのである。

(注) 西山氏の著書 p 248 「知進守退」:『易経』(上) 岩波 p 93~96。

p 39 易: 陰陽の変化をもって天地人三才の道を演(の)べたもの。

p 94 「亢之爲言也、知進而不知退、知存在而不知亡、知得而知喪。其唯聖人乎。

知進退存亡、而不失其正者、其唯聖人乎。

亢の言たる、進むを知って退くを知らず、存するを知って亡ぶるを知らず、得るを知って喪(うしなう)を知らざるなり。それただ聖人か。進退存亡を知って、その正を失わざる者は、それ唯聖人か。

「亢(たかぶる・たかまる) 竜」 亢 のぼりつめる p 79

・易経では、聖人の平衡感覚(中正さ)をのべている。曇鸞においては菩提をもとめて進み二乗地に退墮しない大乘菩薩道をあらわす。

「二には、慈悲の門に入って、すべての現存在の苦悩を除く。現存在を安らかにさせない心からまったくはなれているからである。」

苦悩を根こそぎひき抜くのを慈といい、快樂をあたえるのを悲という。慈によるから、すべての現存在の苦悩を根こそぎひき抜き、悲によるから現存在を安らかにさせない気分から遠くはなれることができるのである。

(注) 西山氏 p 248 「慈悲」の定義は『涅槃経』卷第十五梵行品による。

「三には、方便の門に入って、すべての現存在をあわれむ心をもつ。おのれの身を供養し、

うやまいあがめるなどというおごりたかぶった気分をまったくはなれているからである」  
正直であることを方といい、自身を外に捨て去るのを便という。正直であるから、現存在と  
共に苦しみ共に喜ぶあわれみの心が生まれる。自身を外に捨て去るから、おのれの身を供養  
し、うやまいあがめるなどというおごりたかぶった気分を遠くはなれることができるので  
ある。

(注) 西山氏 p 248 正直を方とする 『論語』にもとづくか？

(注) 便： p 248 『老子』 p 33

「7天は長く地は久し（無私のすすめ）

是を以て聖人は、その身を後にして而も身は先んじ、その身を外にして而も身は存す。そ  
の無私なるを以てに非ずや、故に能くその私を成す。」

西山氏：方便は、菩提の自己表現として、曇鸞は孔子と老子を参照しながら方便を定義し  
ている。もとのウパーヤには、近づく方法の意味かない。

「これを覚存の門を閉ざす三種の障碍を突破するという。」

## 覚存の門

順菩提門（覚存の門を公開する心を示すこと）について、『饗宴』にいう。

「聖なる勇者は、このようにして覚存の門を閉ざす三種の障碍を突破することによって、覚  
存の門を公開する三種の純浄な心を身に完全にそなえることができる。何を三種の順浄な  
心というのか。

一には、けがれの無い純浄な心である。おのれ自身のためにのみ、さまざまな快樂にふけ  
ろうとはしないからである。」と。

覚存とは、けがれの無い純浄な場である。もしおのれ自身のためにのみ、快樂にふけるよう  
なことがあれば、それは覚存に違背する。だから、けがれの無い純浄な心が覚存にしたがっ  
て、その門を公開するのである。

「二には、現存在を安らかにする純浄な心である。すべての現存在の苦悩を根こそぎひき抜  
くからである。」

覚存とは、すべての現存在を安らかにする純浄な場である。もしすべての衆生を救い、生  
死の苦悩を根こそぎはなれさせようとしなければ、それは覚存に違背する。だから、すべ  
ての現存在の苦悩を根こそぎひき抜くことが、覚存にしたがって、その門を公開するのであ  
る。

「三には、現存在に快樂を与える純浄な心である。それはすべての現存在に大いなる自覚を  
得しめるからである。現存在を摂取して、かの安らかな快樂に満ちた国土に生まれかわらせ  
るからである。」

覚存とは、究極的には常に快樂に満ちた場である。もしすべての現存在に常にかわらない快

樂をあたえないならば、それは覚存に違背する。この究極的に常にかわらない快樂は何によって得ることができるのであろうか。それは大乘の門によるのである。大乘の門とは、つまりかの安らかな快樂に満ちた覚存の国土のことである。だから、また現存在を摂取して、かの国土に生まれかわらせる、というのである。

「これを覚存の門を広開する三種の心を身に完全にそなえることだというのである。よく心得ておかななくてはならない。」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

以下、覚書故、印刷不用。

○細川巖述 正信偈讃仰（九）曇鸞章

p 2 0（親鸞聖人の曇鸞に対する感銘）念仏が本願他力の回向であると知らされた。

p 2 2「論註」には、廻向ということが明かしてある

p 5 3如来大悲 願生のうた＝我々の浄土論

p 1 1 8曇鸞の勉強法は、注釈を作る

p 1 2 3論の釈をつくった。北魏仏教の特徴。

p 1 2 4北魏 異民族 南朝 漢民族

（\*西田幾多郎のいう「歴史的な身体」を無視できない。）

p 1 2 6交通事情。北魏 北 沢山の人、経典が入った。

p 1 2 9 龍樹への帰依が根本

p 1 3 6 論をいただく 交通事情。 漢民族に固執しない。

p 1 4 2信心生まれる→五念門の行修す→行成就 他力の行と曇鸞は見破った。

p 1 6 6 五念の行 「論註」本願による（\*歴史的な身体）

p 1 8 7称名は観経、本願は大経にある。

p 1 9 8大きな世界に出る、念仏申す身になる。曇鸞 明らかにする

p 2 2 0 光が木になる

p 2 4 1善不善の心 皆摂取せん 最後の仕事

p 2 7 9信心＝否定道

p 2 8 8教信行から教行信証 曇鸞による

（\*デカルトから西田へ。我思うが故に我あり から 我行為するが故に我あり へ）

p 2 9 7対象化 無碍道

p 3 1 2現代の悲劇 否定をもたない

p 3 4 9 仏様の仕事

p 3 5 8法普賢 ブランクトン 石 みみず おけら 真如法性のなかに生きている

p 3 6 7二十二願 普賢の徳

諸有衆生皆普化

○平野修 浄土論註講義一 メモ

\* 講義の対象は、寺院関係者。そのためやや極端な発言もあるように見える。

p 2 1 道教 ボッカ ボッカ 論註は 民衆が対象

p 2 6 空観 論註の大事なところ。固定的 独立的第一原因はない

\* 唯識

p 2 7 空を根拠づけている考え方が縁起

p 2 8 空という了解から男女の別を乗り越えた。韋提希 無生法忍を得る。

p 3 0 大経ということも 学んだ者(知識人) でないと無理

曇鸞は佛の覚りが民衆のものになる道を開いた

p 3 2 鎌田 中国仏教史 曇鸞

文字だけ見て、勝手な了解しない

p 4 6 実践的課題 仏教 もともと実践的

p 4 9 仏教を保つ行儀 行という問題

p 6 2 本願の定義

p 6 7 傍生 「その人がどうなっても関係ないではないか」(\*原爆をつくった科学者)

p 7 0 弥陀の本願=他力

p 7 1 実践的課題

p 7 8 濁 カチャーヤ 時代の考え方に染まる

p 8 3 外道 道教・儒教の影響下で生活

p 8 5 衣食住 心配ない 個人的学び 声聞 大衆見えず

p 8 7 教理ではない 教団批判

p 8 8 自力 他力 唯識 自力弁才 他力弁才

p 9 1 釈迦一代 自力

p 1 0 5 教団の外の人を問題にすることがない

実践的には声聞と変わらない

p 1 1 0 罪福心

p 1 1 3 近代 人間から仏

本願=法

p 1 1 6 体 浄土? つかみどころ

名号 十七願

信楽 欲生

p 1 1 7 特別なことはありません

経の体 具体化 つかみどころ

p 1 1 9 自力を尽くす 裏腹なもの 仏が願をおこした

p 1 2 1 罪福心 「二」 二元

(\*デカルト 科学で土地から有用なものを取り出す。人間対自然)

地獄餓鬼畜生

p 1 2 2 浄土「一」を象徴

p 1 3 0 法身と色身 教化 応化身

p 1 3 2 本願と報身

p 1 3 4～1 3 5 有機的世界観

寺院のこと

p 1 3 7 自性

p 1 3 8 本願の出所 諸法平等

p 1 5 0 光明無量 寿命無量の背景 釈迦如来

p 1 5 2 莊嚴 かたどる アランカーラ 何何と等しく作る \*唯識 依他起 円成実

p 1 5 3 文学的解釈 イメージはだめ その人の思い 学習にならない

目に見えないものと等しく作る 具体的表現

(\*作られたものから作るものへ)

p 1 5 8 真面目につきあう必要はない

(\*寺院関係者の内輪の話しになっている)

p 1 6 0 原理的に成就できない

名号 知らせる

p 1 6 2 平等の法 我

p 1 8 7 「私」が法の上になりたつ 念仏

p 2 0 1 五念門 あらゆる宗教にある

p 2 0 6 法の普遍性 諸仏

p 2 1 1 かつての課題は脱釈尊中心主義。現在は、脱合理性中心主義。

(\*かつては釈尊への人格崇拜の克服。禅宗では、釈迦何するものぞ という。現代は、デカルトの「実体的我」の克服が課題。取り組んだ人。西田幾多。)